

広島俳句倶楽部

令和五年五月作品集

元宇品の散策 雲雀

まだ寒さの残る早春の日に、元宇品を訪れました。幼い頃の夏には何度も海水浴に訪れました。戦後の復興期だった十歳の頃には小学校の校舎が足りなかったことや、毎日歩いて通ったことなど、この地には特別な思いがあります。実家の墓があり、今でも年に何度かは訪れています。原生林の面影を残した林の中に入ると、大木、高木が天空を覆い隠し、薄暗い空間もあります。また、近代的なホテルが建っている一方、戦時中の高射砲陣地や、防空壕の名残もあり、意外に思えます。灯台から海岸に降りると、遠き通った海水が打ち寄せており、穏やかで平和な今を感じたことでした。

古の人も眺めし椿かな

戦ひを思ひて眺む梅の花

一瞬は昔に戻る春の道

灯台に見下ろしてゐる梅の花

日の差せる広場の桜まだ固し

手袋を外して触るる楠大樹

囀りの下を通りて海岸へ

春の海水の揺らぎに見とれけり

春の浜風に向かひて歩きたる

のんびりとおむすびを食べ暖かし

暁子

《作品鑑賞》
美しい自然と戦時の名残りが混在している元宇品。幼い頃から幾度となく訪れたその地を、心のままに詠まれています。

戦ひを思ひて眺む梅の花

どれだけの兵士が宇品港から出征して行ったでしょうか。梅の花に彼らの悲しみが投影され、今の平和を申し訳なくも有難く思っている作者の心がうかがえます。

手袋を外して触るる楠大樹

四方に枝を張っている大楠、その息吹をじかに感じたくて、素手で触りました。大樹への畏敬が感じられ清々しい一句です。

春の海水の揺らぎに見とれけり

早春の光のなかの波はどこまでも輝いています。その揺らぎに見とれている作者の心に去来しているものは何でしょうか。「見とれる」で作者の心象を想像したくなりました。

半径三キロメートルの発見 村上理江

隙間時間ができる、私は近所の散歩へと出かけます。距離にして半径三キロメートル程度。ほんのわずかな空間ですが、歩く度に何かしらの発見があります。近くの幼稚園、小学校の子どもたち、通りすがりの庭に咲く花々、海から臨む対岸の街など、人々の営みを感じること、自分の生命の躍動を味わうことができます。ですから、今日もまた私は帽子を被り、新たな発見を求めて出かけるのです。

風吹けば鈴鳴る如き董かな

かはたれの鞆雨に濡れるたる

竊の木の陰より初蝶飛び出づる

春風や自転車の子が追ひ越して

沈丁に誘はれ知らぬ路地裏へ

道行けば薨の果てに初音かな

春雨や黄の長靴の登校子

花冷や対岸の灯の点き始む

園庭に数多飛びたる石鹸玉

隣家より夕餉の香り春の月

《作品鑑賞》

生活の中の小さな変化を楽しんでいる様子が目に浮かびます。毎日が冒険の探検隊のようです。今日は何を見つけたのか、教えていただきたくります。

風吹けば鈴鳴る如き董かな
董の小さく揺れる様子がなんとも可愛らしいです。乙女心を感じます。

かはたれの鞆雨に濡れるたる

鞆に傘をさしてやりたくなりました。けれども、雨も優しく降っているようです。

隣家より夕餉の香り春の月

自分のうちの食事のことや、隣の食事の内容が気になってきます。不思議と隣家のことなのに自分のうちのこととも思わせてくれます。出汁の香りがします。

白木蓮に立ち止まりゆく大路かな

鴨残る川を渡れる大路かな

谷ごとに鶯の鳴き大路ゆく

この道を早馬走りし桜かな

八重桜大路は村を一つ過ぎ

鬼ノ城に降つてゐるらし春の雨

備中の雨強くなる桜かな

景桜に鬼ノ城の風よく吹いて

景桜のそよぎそよぎて神の前

石楠花にある喜びと悲しみと

佐保光俊

帰り来し友と卯の花眺めをり

時鳥日の差す谷に聞こえけり

叔母逝きて庭に残れる花水木

風吹けば笑ふやうなり花水木

霞みたる尾道水道夜が明くる

連休の初日朝寝の心地よき

上着持つ腕の白さよ夏隣

逃げ水を白バイ隊の走り来る

夏の波首脳が集ふ島に寄す

雨上がり蜘蛛は再び糸を張る

村上正人

山里の野梅を濡らす朝の雨

初音かなもうどき里の雨あがる

しづけさに彼岸桜の咲き満つる

梅園に風吹いてをり香りをり

初桜朝の窓を開けはなし

百千鳥声よき鳥の名を知らず

橋古りて兩岸に咲く桜かな

咲き満ちし桜を風の散らしつる

小さき葉をあまねく濡らし花の雨

野に咲けるそのままだ好きすみれ草

高尾ひとみ

黒揚羽来てゐる庭や月残り

立夏けふ朝から雨となりけり

濡れ縁に腰掛けて見る山法師

夕映の畑に抜いて夏大根

張り替へし綱戸山風通りけり

行く我にしばらく添うて夏の蝶

庭で食べおにぎり美味し若菜風

すれ違ふ人に会釈し若菜道

薔薇の門くぐり眼科へ行く朝

青菜の下まづ一礼す地藏堂

あざみ

桜咲く工事の土の山の前

花どきの屋根の輝く美術館

物くはへ鴉飛びたり花の山

木の天辺鴉動かぬ日永かな

遅き日の鴉木片くはへたり

星出でて小学校の桜かな

学校へ長き坂道朝桜

瀬戸内の船の灯二つ花の雨

毛艶よきダックスフント花薔

薔薇の芽や煮調の曲のチエロ唸る

亜矢

要頼母が芽吹きを待つてをり

春雷や一人で巡る美術館

旧友の病氣見舞や藤の花

小手毬の花揺るる道教会へ

夏近し患者に習ふ昭和歌謡

訪ねゆく音戸の瀬戸や四月尽く

夏の雨琵琶湖に胡粉引くやうに

信長も見しか安土の田植なり

緑蔭に薔薇は緋色を躊躇はず

夏の朝潜水艦に揺るぎなし

綾乃

船笛を山頂に聞き島の春

春風の艦に立ちたる小鷺かな

桜まじ陸軍墓地に吹きにけり

川風に桜葉降る午後となる

霾るや夕日に島の静かなり

荷揚げ場の船に纏はり春の鴨

老犬の遠吠え止みし朧かな

けざやかに小風に揺るる花水木

一塊の雲動き出し夏始め

薄暑光犬伴うて野に行けり

白躑躅見知らぬ辻に出でにけり

春の宵美文を氣取る日記かな

春の雨砂場に手の跡残りたる

風薫る観光列車の窓広し

老人の集ふ広場や鯉幟

人待ちにニセアカシアの花香る

夏の雨レコードの音紋りたり

蝸牛先に広がる安芸の海

夏祭ここから童駈け出しぬ

麦茶飲む蓄音機など持ち出して

春の富士飛行機雲のどこまでも

富士の山裾にたなびく霞かな

黄心樹の咲ける鎮守に礼参り

黄心樹の咲いて鎮守の森香る

さらさらと風の音する竹の秋

躑躅咲き裏戸に近く迫りくる

母の忌や筍採す背戸の山

牛追うて代掻きをせる父の背ナ

留守の間に満開となり薔薇の花

深緑の嶺従へて富士の山

井藤希

栄吉

大畑恵

春筍や谷にひととき日の差して

時折は驚寄つてくる春田かな

手折りたる山吹浸す谷の水

一八や礎石転がる寺の跡

若葉風朝を灯して経の声

遠近に新樹燃え立つ峡日和

山歸来咲いて古道は崖に沿ひ

待つ人の茅花流しの橋を来る

夏蝶へ瀬音やさしくなりにけり

磴上る一段ごとに青葉風

暁子

蝶々や今日は珍し瑠璃の色

蜂の巣を取る夫皆が見守れる

剪定の後の夫の身木の香染み

連休の日程決まり風光る

男らの巣箱作りのこともの日

村人の筍を積む一輪車

伐り捨てし竹の子切つて子ら遊ぶ

ひた走る慣れたる道の山法師

大瑠璃の来てるる山へ窓開く

家族みな思ひ思ひに草を取る

すみれ

薔薇の庭今日も端まで門開く

夏蝶の大樟越へて地に降るる

もう一度花檣見に橋渡る

大方は川に迫り出し花檣

ながし吹く県境の橋渡りけり

目覚めては泰山木の花仰ぐ

今朝もまた薔薇の手入れの人動く

蓆木を触つてゆける登校児

袋角の鹿と向き合ふ夕まぐれ

蚊を止めたままに顔見る男の子

知佳子

花リラの香り吸ひ込む深呼吸
 家古りて櫓の花の咲きにけり
 屋上の鶯の定位置花万朶
 川面から明けてゆく街花筏
 青柳や雁木に稚魚の集まり来
 羽を平す川鵜に蘆の芽組みたる
 橋渡り青筋揚羽ついて来る
 春の虹急情に過ぎす日曜日
 夏立つや雲の切れ目の青き空
 新樹光デルタの街に風渡る

辻純江

水仙の道どこまでも続きをり
 これほどの水仙を植ゑ湯来の人
 夫と子の声掛け合うて剪定す
 山々の芽吹ける中を歩きけり
 抱きたる吾子の撫でたるチューリップ
 風を受け今日が限りか大桜
 葉の混じる大さ桜に風の吹く
 友倒るただ立ち尽くし朧月
 桜草吾子指さして名を言へる
 薔薇の花見においてよと誘はるる

雲雀

雑踏のコーヒーゼリー無駄に混ぜ
 駅の名が変わったような夏の駅
 弦切れて笑う少女ら夏来たる
 昭和の日若者並ぶ一店舗
 立夏すぎ日付の順に積まれたる
 花柄のコップにビール夏のフエス
 茄子苗が満載朝のカート行く
 蚕豆の莢に未熟の豆がある
 絡まりぬ豌豆の細き蔓と蔓
 新しき階段でさる夏の山

ふじ女

花辛夷父母の家へと子を抱いて

寢室の窓から白き花水木

迷ひたる路地に咲きたる花海棠

桜蕊降る石橋に川端に

山ははや早みどりみどり深みどり

干し魚のくるくる回り薄暑かな

もう少しこの豌豆を太らせよう

大粒の雨の植田を叩きけり

ベランダの手摺越えたり山法師

草むしり育てる草のありにけり

松田裕子

蒲公英を父と競ひて摘みにけり

図画帳に船描きたる春休み

古里の軒につばくろ来たるらし

桜蕊降る漁港への下り坂

雨近き日に小手毬の花を剪る

頬白の声で目覚めし誕生日

花水木ゴールに定め駆け競べ

大繡毬蹴つて雀の飛び立ちぬ

早苗田に映りし雲の早さかな

命日の朝迎へたる麦の秋

村上理江

筍を昨日も今日も明日も掘る

自治会の有志集ひて溝浚へ

母の日も母の口癖よつこらしよ

薔薇の門くぐりフレンチレストラン

繡線菊を手折りて父に供へけり

参道の本立を行けば緑雨かな

背戸山に鳴く老鶯やそこかしこ

一斉に風にうねりて葦青し

日に透ける翅ひらひらと系蜻蛉

軋みつ曲る市電に驟雨かな

森口良樹

車椅子近づけ見せる薔薇の花

街中の若葉ぜんぶに風渡る

所在なき夕べのありて花卯木

夏めくや籠のインコのよく喋り

門柱にゼラニウム掛け叔父の家

ゆつくりと石段下り青葉風

湯上りの藤椅子ククと軋みけり

山門を出れば渡りて青田風

心中の話聞きをり滝しづき

海苔漬の影を揺らして瀬戸の波

花大根空へ空へと吾が背越ゆ

診察の医師と見上ぐる春の雷

麦青む畑に校歌の聞こえる

茅花風母の手甲を軒に干し

縄跳びの土を打つ青春深し

立夏かな音たて茶碗洗ひをり

景桜の土手を部活の子の駆くる

花蜜柑匂へる道を通学す

遠足の子らの一団通り過ぐ

泉邸にひときは赤く牡丹咲く

重たげな雨の朝の牡丹かな

牡丹切るはらりと花弁落としけり

どつしりと宗全籠に牡丹生く

登山道行く手に白き花見上げ

ぶんぶんと群がる虫やえごの花

桑門わかこ

山野ウタ

大原良子

藪の中ひと花著莪群がりぬ

水張りし田んぼに映る躑躅かな

県境を越えれば若菜広がりぬ

芍薬の蕾ふくらむ寺苑かな

石楠花の草の中にて咲き初むる

路を採り始末に追はれ日の暮るる

万緑の我がふるさとの御寺かな

紀英子

蝶々の犬の尻尾を飛び越しぬ

藤を見に写真の夫と茶店へと

花著莪や朝事に向かふ親子連れ

行く春や楽器背負うて下校の子

園児らの寢息すやすや鯉のぼり

少年の返事はつきり風五月

少女らの御籤を結ぶ青楓

高梨英子

イーゼルにモネの絵を架け初夏の店

綱元の鏝絵の鯛や風薫る

茹でし水散らして粽解く親子

帰りにはあやめの二輪開きたり

桐咲くや長元坊は山を越え

人参を初めて切つてキャンプの子

熊谷ゆり子

剪定の済みし庭木に雨しとど

夫植ゑし杜鵑花の盆栽並びけり

本降りの雨に打たるる花あやめ

ベビーカー押す坂道や若菜風

母の日の並んでゐたる花の鉢

青空に太陽のごと花石榴

高嶋銅代

春寒や日にいく度か着て脱いで

春の雨風の強きに服は濡れ

花冷や寒暖計をいく度も見

八重桜どかつと活けし白き壺

暮の春天守は空に浮かびたる

須美れい

見上ぐれば空覆ひたる花櫓

慰霊碑に並ぶ花輪や若菜風

頭垂れ微かに香る雨の薔薇

山梔子の蕾ゆるみて今朝開く

警官に会釈してゆく夏の朝

撫子

初夏の空へリコプターの今日も飛ぶ

牡丹を咲かせる寺や坂の上

玄葵つづく先には叔母の家

金雀枝の続く墓地への道となり

山道の青大将に道ゆづる

美耶

薰風や入江を過ぐる小さき船

水辺にも紫の濃く花菖蒲

夏めくや制服の袖捲り上げ

飛魚や水平線の果てしなく

上島康子

景桜や天寿全うとの知らせ

十薬の強く繋がる根つこかな

朝日さす出窓に目高ひらひらり

日盛りに狭くなりゆく歩幅かな

やす保

空青く若葉まぶしき並木道

母の日は子供に感謝日の暮るる

金川昭子

薰風や女子高生の髪なびき

豊作の庭の梅枝しならせて

河原静子

公園の楠の落葉を踏み散らす

門前のだらさるの花白きかな

民

巣立つかと思へど燕また戻り

夏蕨足より先に目が動き

友岡崇山子

屋根を打つ夕立の音猫怯え

人の声簾の奥にしてゐたる

みさ子

薰風や木の葉を揃ふ露天風呂

小満やもらひ泣きする画面越し

山崎桂子

令和五年四月度作品集より

綾乃 私の選んだ十句

神の山霧氷のままに暮れにけり
 轉りの止むことのなき道の駅
 ゆるぎなき吾でありたし紅椿
 船を見に丘へと青き踏みにけり
 連れ立ちて野辺いつばいに春の風
 いく度か木橋を渡り野に遊ぶ
 母の田に一面に咲く花菜かな
 花咲くと手話のニュースの心地よき
 校庭の桜にタッチ幼き日
 母の忌を終へてしきりに花の散る

佐保光俊
 村上正人
 高尾ひとみ
 あざみ
 井藤希
 曉子
 ちどり
 雲雀
 松田裕子
 友岡案山子

大畑恵 私の選んだ十句

神の山霧氷のままに暮れにけり
 春泥の深き轍に雨の降る
 ゆるぎなき吾でありたし紅椿
 山鳩の声遠くなる花の雨
 花咲くや告知受けたる君と居る
 春昼や珈琲豆を妻が挽く
 チューリップ子らの帰りし部屋に挿す
 クレヨンで紅引かれゐる紙雛
 花馬酔木バスはダム湖に沿うて行き
 裾野より咲き上りたり山桜

佐保光俊
 村上正人
 高尾ひとみ
 あざみ
 綾乃
 井藤希
 すみれ
 村上理江
 森口良樹
 山野ウタ